

令和元年6月27日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03435

研究課題名(和文) 多文化共生社会におけるホストパーソン・支援者の接触支援スキルと意識の変容

研究課題名(英文) Transformation of Supporting Skills and Attitudes of Hosts and Supporters in Multicultural Symbiotic Society

研究代表者

義永 美央子 (Yoshinaga, Mioko)

大阪大学・国際教育交流センター・教授

研究者番号：80324838

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,300,000円

研究成果の概要(和文)：多言語化・多文化化する日本社会の現状を踏まえ、大学、学校、地域・行政の各場面において外国人の支援に携わる支援者を対象としたアンケート調査およびインタビュー調査を実施し、支援者が有する接触支援スキルを特定した。さらに接触支援スキルや支援に関する意識が、外国人や他の支援者等との関係性の構築、外国人をとりまく課題や実情の認識等を通して変容していく過程を明らかにした。また、日本語学習およびその支援に必要なリソースの情報をまとめて紹介するウェブサイト、およびDLAテストの振り返りや支援者の資質・能力の診断を支援するためのツールとして活用可能な質問紙を開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では「大学」「学校」「地域・行政」の3チームに分かれて調査を実施してきたが、随時各チームの研究成果を共有する中で、それぞれの現場でいわゆる「日本語を教える」ことにとどまらず、外国人等の支援や多文化共生を実現する環境整備に従事するための専門性を持った人材(日本語教育者)が必要とされていることが浮かび上がってきた。こうした本研究の知見は、論文や学会発表の形のみならず、一般向け書籍や講演等の形で公開している。外国人受入拡大に向けた法整備が進み、日本語教育のあり方が改めて問われる昨今、本研究は、日本語教育者の専門性をアカデミズムのみならず社会に広く伝えた点でも意義があると言える。

研究成果の概要(英文)：In light of the current situation of Japanese society becoming multi-lingual and multi-cultural, we focused on the education of supporters engaging in the support of foreigners in every setting, including universities, schools, regions, or the government, and surveyed these supporters via interviews and questionnaires. Furthermore, we investigated their skills and perception in terms of establishing contact with foreigners and providing support, as well as the process of transformation of these perceptions. Moreover, we created a website that provides information about the resources necessary for learning Japanese and supporting Japanese language acquisition. We also developed a questionnaire that can be administered after Dialogic Language Assessment (DLA) or DLA training as a tool for facilitating the assessment of supporters' aptitudes and skills, as well as DLA testers' observations.

研究分野：日本語教育学

キーワード：多文化共生 支援者 支援スキル 意識 自律学習支援 JSL対話型アセスメントDLA 地域日本語教育 変容

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本語が使えることが強力な文化資本となる今日の日本社会において、外国人・日本語非母語話者への日本語教育および学習支援は喫緊の課題とされ、その対象は大学・大学院等の留学生から、外国につながりを持つ子どもたち、地域で生活する外国人などに広がっている。またその支援の場においては、支援者・被支援者の双方が互いに学び合う必要性があると従来から指摘されている(岡崎 1994, 田中 2000 など)。本研究ではこれらの主張に基づき、日本の大学、学校、地域・行政の各領域において、日本語教育や日本語学習支援の実践に従事する人々の学び、特に支援を行う上でのスキルや意識の変容に焦点を当てる。

本研究は、義永(2015)が示した方向性に依拠しつつ、日本の大学、学校、地域・行政の各場面におけるホストパーソン・支援者の学びに焦点を当て、支援者のスキルと意識両面での変化を実証的に明らかにする。なお実際には、日本社会での生活経験や日本語に関する知識が豊富な外国人・日本語非母語話者が支援者となる場合も大いにあることから、ここでのホストパーソン・支援者には外国人・日本語非母語話者も含むこととする。さらに、これらの具体的なデータに基づく支援者(今後新しく支援者となる人も含む)のための研修ガイドラインを開発する。本研究の申請者らは、いずれも各場面での実践・研究の実績を有しており、これまでの蓄積を生かしつつ、本研究の研究課題に取り組んでいく。

2. 研究の目的

従来、日本社会で生活する外国人の増加を考える際には、いかに外国人を日本社会に適應させるかという観点で、日本語教育や生活支援などの取り組みが行われてきた。しかし、本研究ではホストパーソン・支援者側も変わる必要があるという認識のもとに、その変容を接触支援スキルと意識の両面から具体的に明らかにする。また、ホストパーソン・支援者を日本人・日本語母語話者に限るという固定観念から脱却し、支援者の役割を担う外国人・日本語非母語話者にも焦点を当てる。そして、これまで別々の取り組みとして個々に実施されてきた大学/学校/地域・行政の各場面の研究を有機的に統合し、それぞれの場面における支援の共通性と個別性を明らかにする。これらの取り組みを通じて、日本社会における外国人支援の質の向上、および、多様性のある人々が共存する多文化共生社会の構築に貢献することが本研究の究極の目標である。

3. 研究の方法

本研究では、日本社会において外国人に対する支援が行われる場面として、大学、学校、地域・行政の3つを設定し、以下の方法で支援者の接触支援スキル及び意識の実態を明らかにする。

1) 各場面で外国人と接触の機会がある、または支援・指導を行う立場にある人々に対してアンケート調査を実施し、日常の外国人との接触および支援・指導業務の実態や問題点を明らかにする。

2) 1)の調査に基づき、日常的によく実施され、重要性が高く、かつ問題が生じやすいコミュニケーション場面を同定し、実際のコミュニケーション場面の分析を通じて、支援者の接触支援スキルの実態を明らかにする。

3) 2)の調査にあわせてインタビュー調査を実施し、支援者の外国人や外国人とのコミュニケーションに関する意識およびその変容の過程を明らかにする。

4) 1)から3)の調査で明らかにした知見に基づき、支援者(今後新しく支援者となる人も含む)のための研修ガイドラインを開発する。

4. 研究成果

本研究では、「大学チーム」「学校チーム」「地域・行政チーム」の3つのチームに分かれてデータ収集及び分析に取り組んだ。大学チームは、大学における学習支援者を対象としたアンケート調査及びインタビュー調査を分析し、支援の実践を通じた支援者側の学びを記述した。その結果、支援者は主にスキルや態度面での自己の変化や成長、具体的には、「コミュニケーション能力の向上」「学習・研究に対する姿勢の変化」「積極性・主体性の向上」「支援者としての自覚の向上」「視野や態度の変化」「日本語に対する理解の深まり」「学習意欲の向上」を認識していた。また、自律学習を支援するためのオンラインプラットフォームを企画し、大学における日本語学習者および学習支援者に、日本語学習に必要なリソースの情報をまとめて紹介するウェブサイトを開発・公開した。

学校チームは、外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLAのテスター(以下、DLAテスター)を学習支援者と位置づけ、対話型アセスメントにおけるテスターの言語行動に関する分析を進めた。まず、子どもを対象とした対話型アセスメント(DLA、DRA)の談話(395本)を分析し、アセスメント実施者のスキル(実施者による「ほめ」の実態、レイティング可能な発話を引き出す談話構造)を解明することができた。また、DLA実施者の意識と言語行動の変容を解明するため、質問紙の開発を行い、DLA研修会直後とDLA実施後に質問紙調査(協力者15名)を実施した。その結果、DLA研修会への参加やDLA実施の経験によって、DLA実施者が変容することが確認され、経験を積むことで、より適切な方法でDLAを実施できるようになることが分かった。

地域・行政チームは、地域国際化協会等の職員、ボランティア支援者、日本語学習経験のある外国人を対象としたインタビューデータを質的に分析し、それぞれの視点から支援者として求められる資質や能力を明らかにした。また、インタビューの分析の結果から、日本語支援者に対して行う質問紙の項目を選定した。さらに、これまで分類や整理が不十分であった、地域日本語教育支援者に対する研修等に関して、「研修対象者」「研修担当者」「内容」等の観点から精査を行った。

本研究では上述の3チームに分かれて調査を実施してきたが、随時各チームの研究成果を共有する中で、それぞれの現場でいわゆる「日本語を教える」ことにとどまらず、外国人等の支援や多文化共生を実現する環境整備に従事するための専門性を持った人材(日本語教育者)が必要とされていることが浮かび上がってきた。こうした本研究の知見は、論文や学会発表の形のみならず、一般向け書籍や講演等の形でも公開している。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計14件)

御館久里恵、地域日本語教育に関わる人材の育成、日本語教育、招待・査読有、172、2019、pp.3-17

義永美央子・潘英峰、学習支援の経験を通じた支援者の学び 図書館ラーニングサポータ

一の調査から、大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流、査読無、23、2019、pp. 53-64

金孝卿・山田真知子、オンラインでのケース学習における学習者の学び 問題解決のための協働的なコミュニケーションに着目して、大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流、査読無、23、2019、pp. 43-52

嶋津百代、日本語教育・教師教育において「語ること」の意味と意義 対話にナラティブの可能性を求めて、言語文化教育研究、招待・査読有、16、2018、pp. 55-62

永田良太、DLA<読む>における実施者の「ほめ」- 実施回数の違いに着目して -、広島大学大学院教育学研究科紀要、査読無、67、2018、pp. 141-146

義永美央子、まなぶ・つなぐ・つくる ポスト・コミュニカティブアプローチの時代における教師の役割、リテラシーズ、招待・査読有、20、2017、pp. 24-40

Yukiko Hatasa & Tomoko Watanabe、Japanese as a Second Language Assessment in Japan: Current Issues and Future Directions、LANGUAGE ASSESSMENT QUARTERLY、査読有、14/3、2017、pp. 192-212

他 7 件

〔学会発表〕(計 42 件)

義永美央子・金孝卿・渡部倫子・神吉宇一、日本語教育人材の支援スキルと意識の変容 日本国内の大学、学校、地域・行政で求められる資質・能力の再検討、2018 年度日本語教育学会秋季大会パネルセッション、2018

義永美央子、オンライン自律学習支援サイト「OU 日本語ひろば」の構想について、第 11 回大阪大学専門日本語教育研究協議会、2018

嶋津百代、教師を行為すること・教師になること 日本語教育実習生のアイデンティティ形成とキャリア観、韓国日語教育学会・言語文化教育研究学会共催 2018 年度第 34 回冬季国際学術大会パネルセッション「キャリア形成とアイデンティティ 就職に関する当事者視点からの考察」、2018

渡部倫子、DLA<読む>研修による教員の成長、大学日本語教員養成課程研究協議会、2018

山田真知子、日本の就職活動に必要な自己分析 留学生とラーニング・アシスタントの協働的な学びの効果、協働実践研究会第 14 回研究会、2018

櫻井千穂、文化言語の多様な子どもの二言語能力の育成 学校現場におけるアセスメントとサポートのあり方を考える、第 43 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会、招待講演、2017

柳田直美、日本人学生を対象とした多文化共生対応スキル養成プログラムの実践 「やさしい日本語」を用いた多文化共生対応のための言語スキルの養成、2017 年度異文化間教育学会第 38 回大会、2017

他 35 件

〔図書〕(計 9 件)

義永美央子・嶋津百代・櫻井千穂他、凡人社、ことばで社会をつなぐ仕事 日本語教育者のキャリア・ガイド、2019、120

本田弘之・岩田一成・義永美央子・渡部倫子、大阪大学出版会、日本語教育学の歩き方 初学者のための研究ガイド・改訂版、2019、296

〔その他〕

ホームページ等

OU 日本語ひろば <https://ou-hiroba.jp/>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：嶋津百代

ローマ字氏名：SHIMAZU, Momoyo

所属研究機関名：関西大学

部局名：外国語学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 90756868

研究分担者氏名：金 孝卿

ローマ字氏名：Kim, Hyokyong

所属研究機関名：早稲田大学

部局名：日本語教育研究センター

職名：准教授

研究者番号(8桁): 30467063

研究分担者氏名：渡部倫子

ローマ字氏名：WATANABE, Tomoko

所属研究機関名：広島大学

部局名：教育学研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁): 30379870

研究分担者氏名：櫻井千穂

ローマ字氏名：SAKURAI, Chiho

所属研究機関名：同志社大学

部局名：日本語・日本文化教育センター

職名：准教授

研究者番号(8桁): 40723250

研究分担者氏名：永田良太

ローマ字氏名：NAGATA, Ryota

所属研究機関名：広島大学

部局名：教育学研究科

職名：准教授

研究者番号(8桁): 10363003

研究分担者氏名: 神吉宇一

ローマ字氏名: KAMIYOSHI, Uichi

所属研究機関名: 武蔵野大学

部局名: 言語文化研究科

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 40726551

研究分担者氏名: 御館久里恵

ローマ字氏名: OTACHI, Kurie

所属研究機関名: 鳥取大学

部局名: 教育支援・国際交流推進機構

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 60635291

研究分担者氏名: 柳田直美

ローマ字氏名: YANAGIDA, Naomi

所属研究機関名: 一橋大学

部局名: 国際教育センター

職名: 准教授

研究者番号(8桁): 60635291

(2)研究協力者

研究協力者氏名: 潘 英峰

ローマ字氏名: PAN, Yingfeng

研究協力者氏名: 山田真知子

ローマ字氏名: YAMADA, Machiko

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。